

中村 須恵さんの絵を観たときに、見たことのない色、光の感じに心を打たれました。まずは画材、特に岩絵具はどういうものなのかをお聞きしたいと思います。

須恵 私の絵は木製パネルに高知麻紙という厚い紙を水張りしています。その上に胡粉を染料系の絵具で着色した水干絵具を使うことが多いです。水干絵具は粒子が細かくて良く伸びます。そして安価。大画面にいきなり岩絵具を使うとお金がかかるので、経済的な理由もあって下地に使っています。

中村 岩絵具は、天然の石から作られるんですね。

須恵 群青の原料はラピスラズリと藍銅鉱。地球の中のマグマから表面に出てくるときに、こういうものが奇跡的にできる。同じ群青でも成分は違う。緑青の原料は孔雀石です。

中村 きょうだいなんですね。

須恵 化学式は最後のひとつだけ違う。色は全然違うけど群青と緑青は近いんです。昔よく使ったのはヘマタイト。自分で石を砕いて作ると雑味があって、売っている絵具ではない素敵な色ができるのが面白いんです。

中村 多摩川の石からでも絵具が作れるんですね。

須恵 たまに岩絵具作りのワークショップをするんですけど、身近な石とか土とか硝子から絵具が作れるのは魅力ですね。

中村 昔は天然の岩を使っていて、あるときから新岩絵具という硝子を使った絵具が出てきたそうですね。

須恵 日本画で使う岩絵具の種類は、天然、新岩絵具、合成……天然は地球上で自然にできた絵具です。新岩絵具は硝子で染料系の絵具で着色して粉にして粒子分けしたもの。合成は方解石に着色したものです。新岩絵具は微量ですが鉛も入っていて体に良くないので、女子美ではセラミックを粉砕して着色した女子美エコ絵具という絵具も作っています。

中村 岩絵具が棚にならんだ光景は美しいそうですね。

須恵 私は高校2年生のときに予備校で日本画体験をして、そのときに、興味あるなら画材屋に行ってごらん、と言われて、上野の得應軒に行って、いっぱい絵具の瓶が並んでいたのを見て、わーっとなったんです。粒もきれいだから。

中村 日本画は膜がなくて粒子になるんですね。

須恵 油絵は油にコーティングされているものがチューブに入っていて、水彩はアラビアガムが混ざっている。日本画の場合は粒。ピグメント（顔料）は一緒ですけど、膠を接着剤にして、自分で接着をコントロールできるので、塗り方によって発色が変わってくる。純粋な絵具なところが魅力ですね。

中村 絵には砂を乗せている部分もある。

須恵 砂も、そのへんの川で拾った石から作れます。私の場合は泥絵具を混ぜて盛り上げるので、あまり色がついていない方が良いんです。前は市販の「北米大陸の砂」を気に入って使っていたんですけど、絶版になってしまっただけ。今は室内用砂場の砂を細かく砕いて、ふるいにかけて。粗すぎると落ちちゃうし、細かいとヒビが入っちゃうので、試行錯誤して使いやすい粒子に落ち着いています。

中村 絵画だから二次元的なものを思い浮かべるんですけど、多摩川の石とか、砂を盛り上げるとか、自分の身のまわりにある世界でできているので、生きている感じがすごくするなと思いました。ちなみに《ニライカナイに想う》という絵を描くために何種類くらい絵具を使っていますか？

須恵 絵具の量はわからないですけど、ひとつの色でも粒子の粗さによって濃さが変わるので10種類くらいあるんですね。それを何種類も使って描いているので、どうですかね（笑）。

中村 いっぱい、というふうにしか言いようがないですね。

須恵 今度数えてみます。何層塗っているんですかと聞かれたことがあって、カウントしたら平面的なところで、だいたい15から20層くらいでした。

中村 久高島に行って一定期間じっと観察して過ごす時間を取材と呼んでいらっしゃることを面白いと思いました。

須恵 久高島は沖縄本島の南東の南城市にある安座間港からフェリーで20分ほどのところであって、神の島と言われていいます。アマミキヨという神様が久高島に降り立って、そこから本島に渡って琉球王国を開いたと言われていっているんです。

中村 知る人ぞ知る、神様の島。

須恵 そこに取材に行って12年くらいたつんです。

中村 神様の島であると知らずに、偶然行ったそうですね。

須恵 2012年に母が亡くなって、そのあと体が凝り固まって絵を描けない時期があって、これは南の島へ行くしかないと思って、沖縄に行ったんです。本島に友だちがいたので泊めてもらって。それで久高島にも嫁に行った友だちがいて、こっちに来てみたら、と誘われたんです。そのとき海を見て、体にのしかかっていたものが流れていく感じがして、この島には何かあるぞ、と直感しました。神様の島と知らずに行ったのも失礼な話なんですけど。それから帰って作品をつくって、毎年通って、気がついたら12年描き続けています。

中村 久高島には、呼ばれてきたとか、引きが強いと言われていますが、そんなふうに感じられたんでしょうか。

須恵 久高島の前に屋久島に通っていたときは樹の根っこを描いていたんですけど、屋久島も久高島も、ものすごい生命体みたいな島で。屋久島も何で知ったのかはわからないんですけど、その前から切り株や根っこは描いていて、どうしても屋久島へ行かなければいけないんだ、私はって（笑）。

中村 根拠はない、でも行かなきゃいけない……ありますよね、わかります（笑）。

須恵 来るべくして来たというか。久高島も土地の力が強い感じがします。

中村 竜神雲が出たりするんですね。

須恵 私は東の海を取材しているんですけど、海の向こうにはニライカナイという理想郷があると言われていて。東の海であることは重要で、朝日を見るんです。でも昼に行くけど毎回、竜神雲が見える。最初は友だちといっしょに行って、あれ竜神雲だよって言われて、へーって。竜神雲も知らなかったんですけど、きっと歓迎されているって思い込んで。

中村 わかります。きっとそうだって（笑）。

須恵 毎年行くたびに……まあ、浜にいる時間が長いことあるんですけど、今回も歓迎してもらいましたって。

中村 私は取材というとICレコーダーやNotebookを持って、何々さんに会いに行つて話を聞こうとかするんですけど、須恵さんの場合は取材でどういうことをするんでしょうか。

須恵 東の海に向かう浜で朝日を取材したときは、スケッチ道具も持って行かず、日の出前に出かけて行き、ただ日の出をじっと見えています。スケッチとかはほぼせず、ただ毎日2〜3時間くらいそこにいる。そのものを忠実に再現しようというより、体感した空気とか印象を受けとろうと……

中村 人類学のフィールドワークを想起させる話だなと思いました。今は色んな場所に移動しながら調査する方もいるんですけど、私は昔ながらの同じ場所に戻ってくるタイプで、何をしているかという、五感をすごく開いて、頭を優先で考えるよりも、自分の身体で何が受けとれているのかなと感じとれるようなモードで過ごすので。

須恵 学問は座学のイメージがあるんですけど、人類学がフィールドワークを大事にされていると聞いて共感しました。

中村 フィールドワークも、実際に見たり聞いたりしたことはノートにとれるんですけど、それ以上に実感したリアルなものあって、これをどうやって分かち合えるんだろうというところで力を試されるんですね。だから須恵さんが、この先にニライカナイがあって、そこに行きたいという気持ちで、実際に見たことと別の感じ方で臨んでいるのが、私にとってすごくインスピレーションになったんです。取材のときも、そういうことを意識して、自分を空っぽにする……

須惠 そう、空っぽにする。浜にいて、できるだけ無になる。絵を描く前も、家庭や仕事のことで頭がいっぱいになっていると、瞑想して、なるべく空っぽになるよう心掛けてから絵に向かう。久高島にいて、ニライカナイがつかまっていることを空想して、描く。どこかに行っちゃってるんですね。

中村 私も書いているとき、どこかに行っちゃってるので、出てきたものを読んだときに、誰が書いたの、これってなるんですね。後ですごく恥ずかしくなったり、読みなおすのが嫌になったり……それって、あの場所に、あの時間に、戻って書いている。今の自分とは違う自分に書かされている。須惠さんは、時には浜でスケッチもされるんですね。

須惠 白黒で描くときは鉛筆やチャコールペンとかを使って、あとはパステルとか、水彩絵具、水彩鉛筆。久高島のシリーズになってからは具体的にゴリゴリ描くことは少なくなって。

中村 スケッチしようかなと思ったときに描く。

須惠 そうですね。寝転がって空を見ていたり、浜で海を見ていたりして、描きたくなったら描く。それも最初から絵にしようと思って描いているのはあまりなくて、ちょっと描いてみようかなという感じで描いて、その経験を積み重ねて、イメージがだんだん湧きあがってきて、描く。

中村 コンセプトが先にあって、それを忠実に表現するタイプの方もいるし、須惠さんのように、ある場所に引き込まれるように行って、そこで何かを受けとって、その何かは何であるかを、もう一回自分で見るために表現して、という……人類学者のなかにも割とそういうタイプの人がいて（笑）。

須惠 中村さんはそういうタイプなんですか（笑）。

中村 1回だけ賞をもらったときに、いっしょに受賞した方はすごく理論的に洗練されていると言われていて、その後で中村さんはとてもフィールドに溶け込んでいるって評価でしたので、おそらくそうなんじゃないかなと思います。

須惠 研究やリサーチも、憧れというか、ちょっとそういうこともやった方が良いのかなと思いつつ、結局、自分の肌に合うものになってくるんですよ。

中村 ちょっと無理している感じがね（笑）。

須惠 がんばってやったけど、やっぱりこっちの人だったと。

中村 肌に合う人は本当に上手に概念と戯れるんですけど、私はそれをやると自分が無理をしているというか。それから小説や映画を見ているときに、自分の体ごとどこかに連れていかれる感覚になることがあって。人類学者が書く民族誌もそういう経験に基づいて書くと、ここではないどこかへ行く passage（通路）として読む。須惠さんの絵も、私は passage として受け取ったんです。頭で考えて、ニライカナイはこういう神話ですよ、というものを読んだだけでは、へーって終わると思うんですけど、体ごと沈潜させて生まれてくるものは、その人の体の動きを追体験する感じで。ものごとを整理して考えることは確かに大事だけど、passage に乗ったり、乗ったりする力を私は信じているところがある。

須惠 12、3年前に描きはじめた頃は、ちょっと沖縄に行って描いたんでしょ、という見られ方をしていたんですけど、長く繰り返して、こういうものを表現したいと思い続けてやっていたことで、そういうことは言われなくなりました。

中村 説得力が生まれたんですね。

須惠 続けることで、認めてもらえたのかなと思いますね。

中村 須惠さんその人と分かちがたいものになっているんですね。沖縄に通う時間は、須惠さんの人生のなかで欠けてはいけない時間。

須惠 しばらく行かないと枯渇してくる。久高島が必要だ、みたいなことがあって。久高が切れたって（笑）。久高島にはまる人は多くて。神様の島なので土地が買えなかったりとか、旧暦で過ごすとか、言葉も久高島にしかない発音があって、それを研究しに来ている大学の先生もいたりして、とても不思議な島です。そこに取っつかれた人を久高病と言って。関東でも久高好きの人と出会ってつながっていくんです。

中村 つくることの根幹のところ、どこに行ったのか、どこの土地で何と出会ったのかは、ものすごく大きくて。

須惠 そうですね。最近は情報過多で頭がパンクしそうになるんですけど、なるべく感覚を開いていきたいな、と思って。出会う人だったり……この人って思ったら、つながっていたりするじゃないですか。

中村 この場ではこういうふうに言うことが求められているんだろうな、というコミュニケーションはいくらでもとれるけれども、やっぱり一度しか会えないかもしれないその人と出会ったときに、本当に自分を開いて受け取っているかとか、思いがけない方向に自分が行くんじゃないかとか、須惠さんと話していて、あらためて思いました。

須惠 屋久島も久高島も気づいたら10年くらい経っていて。作家もいろんなタイプがいると思うんですけど、私は自分が引張られるものじゃないと、なかなか心が動かない。興味ある限り描こうと思っていて、そのスパンがどうも長い。

中村 ずっと通うといっても、常に1回限りの瞬間に新たに出会っているの、同じものを見ているわけではない。

須惠 よく10年も、と自分でも思うんですけど、やっぱり久高島の魅力が素晴らしいので、まだそこに近づけていないと思うところもあって。写実という意味じゃなくて、もっと空気をリアルに描きたい。

中村 場所の変化によって描かれているものが全然違うものになっていて、須惠さんの受け取る力、身体ごと入って行って表現に移す力を感じるんです。屋久島の絵には噴き出してくるエネルギーを感じて……

須惠 日本画をはじめたときから樹の根っこは描いていて、土の上に出ているものより、根っこの方がうごめく命というか、エネルギーを強く感じていたんです。それで屋久島のシリーズは、根っこというモノを中心に、命、生だけにフォーカスしていた。生の先に死があるというのはわかっていたんですけど、母の死を通して実感して、久高島に出会って、生と死の両方——エネルギーがあふれる命だけじゃなくて、その先の命を思うようになったのかな。

中村 モノに宿るエネルギーの表現方法と、その先の世界を想いながら生きていくことができるかもしれないというときに絵を描く表現方法には、違いがあるんですか。

須惠 樹のシリーズは表現も直接的で、絵具を乱暴につけている部分と背景を効果的にどう見せるか、というのがあったんですけど、久高島のシリーズになってからは、もっと全体の空気感に変わっていった感じですかね。

中村 たしかに背景と樹を分けると、モノが浮き上がってきて、それが生きて、ある、という力が観ている人を打つと思うんですけど、久高島のシリーズは力が空間に充満して包みこまれるような気持ちにさせてくれて、対照的に感じます。

須惠 樹のシリーズは、力を表現するために、盛り上げ部分を一発描きで、ガツンとやっけて。久高島はどうしたら空気を表せるか考えていたら、どんどん層が重なって、下地の色が見えなくなって。本当は盛り上げている下地はピンクだったり、実験的に銀箔を貼ったりすることもあるんです。岩絵具は粒子なので積み上げていくのが得意なんですけど、隙間から下の色が見えて、人の目には混ざって見えたり、光によって反射で違って見えたりして、結構、奥が深いんです。

中村 自然界の見え方に近いものがあるのではないかなと思いました。いろんな粒子が層になって、どこに光が当たるかで全然違う見え方をしていく。それ自体が自分を取り巻いている空気と親和性があるような気がしました。

須惠 空気を岩絵具で描いたら、より表現できるのでは、という思いはあったんです。

中村 先ほど、まだリアルなところまで行けていないと仰いましたが、そう思いながら何回も通って、描き方も試行錯誤して、常に須惠さんがちょっとずつ変わりながら生きているのかな、と思いました。（まとめ：岡村幸宣）